

第二言語習得理論に基づいた英語スピーキング力育成のための 講座構築に関する研究

Examination of the development of a course for enhancing English speaking proficiency
based on second language acquisition theories

服部 孝彦¹, ティモシー ライト², グレゴリー ジョンソン³, 高野 成彦⁴, ローレンス カーン⁵
Takahiko Hattori¹, Timothy Wright², Gregory Johnson³, Narihiko Takano⁴, and Lawrence Karn⁵

¹英語教育研究所, ²社会情報学部, ³比較文化学部, ⁴教職総合支援センター, ⁵英語教育研究所

キーワード：第二言語習得, 英語スピーキング力, インプット, インタラクション, アウトプット
Key words : Second Language Acquisition, English Speaking Ability, Input, Interaction, Output

1. 研究目的

本研究の目的は、第二言語習得理論に基づき、効果的に英語スピーキング力を向上させるための個別指導による英語スピーキング講座を構築し、本学の英語教育に貢献することである。本研究ではまず、これまでの第二言語習得研究の流れと言語習得の認知プロセスを整理した。その上で、理解可能なインプットを大量に与えることにより第二言語習得は自然に促進されるとした Krashen (1982, 1985) を中心としたインプット仮説 (input hypothesis) を考察した。続いて、第二言語を使った意味交渉 (negotiation of meaning) の機会を多く持つことにより、第二言語習得は促進されるとする Long (1983) を中心としたインタラクション仮説 (interaction hypothesis), さらにアウトプットの重要性に焦点を当てた Swain (1985) を中心としたアウトプット仮説 (output hypothesis) について考察した。第二言語習得を促すインプット, インタラクション, アウトプットの役割, 及び言語習得の認知プロセスを理論的に検討したうえで、本学で学ぶ学生のための、第二言語習得理論に基づいた個別指導による英語スピーキング講座を構築し、実施した。

2. 研究実施内容

2.1. 第二言語習得研究の流れ

1960年代後半以降、第二言語習得研究が盛んに行われるようになった。そのきっかけとなったのは Corder (1967) である (馬場・新田, 2016)。Corder

(1967) は、学習者の誤りこそが、第二言語習得の発達段階を示す重要なヒントとなると述べ、error と mistake を区別した。Mistake はつい口から出てしまった一時的な誤りであるのに対し、error は学習者の現在の能力に起因する発達途上の誤りであると捉えた。学習者の error は mistake のような表面的な誤りとは異なり、第二言語習得の発達段階を知る重要な手掛かりになると考えた。

1950年代から1960年代は、構造主義 (structuralism) と行動主義 (behaviorism) に基づいて、第二言語習得とは第二言語の構造を模倣することによって習得すると考えられていた。したがって、第二言語の習得では、第一言語の知識がいかに転移 (transfer) するかが問題とされた。これに対し Corder (1967) は error を第二言語習得の途中で必然的に生まれるものと捉え、誤用分析 (error analysis) の研究から、ビルトインシラバス (built-in syllabus) があると考えた。ビルトインシラバスは、学習者の内部に第二言語の習得順序が備わっているとする考え方である。Corder (1967) のビルトインシラバスは、指導面において教師中心 (teacher-centered) から学習者中心 (learner-centered) へと転換を促すきっかけとなった。Corder (1967) の研究以降、認知的アプローチが主流となり、第二言語習得研究を大きく発展させた (馬場・新田, 2016)。

認知的アプローチには、言語を他の能力とは異なるものと捉える Chomsky (1965) の生得主義の立場と、第二言語習得も他の学習と同様であるとらえる立場がある。現在は後者の立場が第二言語習

得研究の主流となっており、その代表的なアプローチが情報処理アプローチである。

情報処理アプローチでは、インプットされた第二言語が、気づき (noticing), 理解 (comprehension), インテイク (intake), 統合 (integration) のプロセスを経て習得されることで、アウトプットできると考える (Gass, 1997; 2013; Gass et al., 2020)。

インプット後の第二言語習得の最初のプロセスが気づきである。大量の情報は、注意を向けられることによってはじめて気づきが生まれ、短期記憶 (short-term memory) に保持される。2番目のプロセスは理解である。Gass (1997) は、理解には単に意味だけを理解している浅い理解と、形式や機能まで理解している深い理解があるとしている。言語の形式、意味、機能の結びつきを把握している認知プロセスは仮説形成 (hypothesis formulation) ともよばれている (Gass, 1997, 2013; 村野井, 2006)。3番目のプロセスであるインテイクでは、気づき、理解したインプットを中間言語へと取り込むプロセスであり、理解の段階で形成された仮説を検証 (hypothesis testing) することになる。最後のプロセスである統合では、取り込んだ情報を長期記憶 (long-term memory) に保存する。気づきの段階で短期記憶に保存された情報は、そのままではすぐに消えてしまう。理解し、インテイクされ、学習者の中間言語 (interlanguage) に組み込まれてはじめてアウトプットに活用ができる。効果的な第二言語学習とは、このような認知プロセスを促進するインプット、インタラクション、アウトプットの機会をいかにして確保するかにかかっていることになる (廣森, 2015)。以下、インプット、インタラクション、アウトプットの理論について考察する。

2.2. インプット

インプットとは、言語を習得するために学習者が入力する言語データである。Krashen (1981, 1982, 1985) は第二言語習得におけるインプットの重要性を強調し、インプット仮説 (input hypothesis) を提唱した。この仮説では、理解可能なインプット (comprehensible input) が第二言語習得を促すと考えた。理解可能なインプットとは「 $i+1$ 」で示され、 i は学習者がすでに習得しているレベルであり、「 $+1$ 」はそのレベルを少し超えたレベルを指す。Krashen は、理解可能なインプットのみで第二言語習得は可能であると主張し、インプットが第二言語習得の必要十分条件であるとの立場をとった。

インプット仮説の背景には、Chomsky の普遍文法の影響がある。Krashen は母語習得と第二言語習得のプロセスは同じであり、第二言語習得においても、理解可能なインプットを大量に受け入れることにより生得的な言語習得装置 (language acquisition device) が機能すると考えた。インプット仮説に対しては、アウトプットの必要性や、この仮説の妥当性を実証的に検証できないなどの批判はあるが、これらの批判は、いずれもインプットの重要性を否定してはいない。

Oller (1976) は、インプットを大量かつ継続的に受けることにより、目標言語の予測文法 (expectancy grammar) を習得できるとしている。先読みや行間読みは、インプットを大量に取り組むことによっ

てはじめて身につく力である。さらにインプットは、自らの中間言語と目標言語の間にあるギャップに気づくものにも役立つ。インプットは、現状の言語知識である中間言語と目標言語とのギャップを認識すると共に、そのギャップを埋める役割を果たすという意味で第二言語習得を促進するといえる (廣森, 2015)。

効果的に第二言語習得をするためには、インプットの質を高める必要がある。先にも述べたとおり、インプットされた情報に気づき、その気づきにより認知プロセスがはじまる。気づきを意図的に促す方法としては、インプット強化 (input enhancement) やインプット洪水 (input flood) がある。これらは学習者の注意を重要な言語形式に向けるなどの方法である。 (Doughty, 1991; Izumi, 2002; Sharwood Smith, 1993)。

2.3. インタラクション

1980年代後半に、アウトプットや意味交渉に焦点を当てたインタラクション研究が多くされるようになってきた。意味交渉とは、会話において相手の言っていることが理解できなかった場合、確認チェック (confirmation check) や明確化要求 (clarification request) をとおして、相互理解に向けて会話の修正を行うことである (JACET SLA 研究会, 2013)。意味交渉で取り上げられた言語形式が、実際のアウトプットでどのように反映されているかに関する研究もおこなわれるようになった (Gass & Varonis, 1994; Pica 1988)。

インタラクションは、インプットとアウトプットにかかわる言語処理プロセスとして必要不可欠である。インタラクション仮説を提唱した Long

(1983)は、はじめは学習者がやり取り (negotiation) を通して得られた修正されたインプット (modified input) が第二言語習得の必要十分条件としていた。しかし、理解されたインプットが必ずしも習得されるとは限らないことから、理解されたインプットは、言語能力やワーキングメモリの容量などの内容的要因である認知的フィルターと相互作用し、学習者の注意が向けられたもののみがインテイクされ、習得が促進されると訂正した (Long, 1996)。すなわちインタラクション仮説は、コミュニケーションに支障が出た場合、問題を克服するためにインタラクションが意味のあるやりとりとして生じるとするものである (高島, 2011)。

インタラクションが認知プロセスにおける理解とインテイクを促進することに関しては疑問を持つ研究者はいない。インタラクションの機会を多く作り出すうえで、ロールプレイやインフォーマーセッションギャップといったペアワークやグループワーク活動は有効である (廣森, 2015)。Long & Porter (1985) は、ペアワーク、グループワークの意義として、(1) 言語使用の機会を増やす、(2) 学習者の対話の質を改善する、(3) 個別指導を促進する、(4) 情緒的に安心できる雰囲気を作り出す、(5) 学習者の動機づけを高める、と指摘している。

2.4. アウトプット

第二言語習得理論研究におけるアウトプットは、学習者が産出する言葉である (VanPatten, 2003)。Levelt (1989) は、言語の産出には複合的な段階があるとし、言語産出モデル (語彙仮説モデル: lexicalist hypothesis model) を提唱した。このモデルは、概念化装置 (conceptualizer)、形式化装置 (formulator)、調音装置 (articulator) という3つの中心となる機構から構成されている。

発話しようとするメッセージが生じると、概念化装置ではどのような情報を産出すべきかを選択したり、情報伝達の順番を決めたりする。そこで言語前メッセージ (preverbal message) が生成される。次に言語前メッセージが形式化装置に転送され、文法コード化 (grammatical encoding) と「音韻コード化」 (phonological encoding) が行われる。この2つの過程は、語彙目録 (lexicon) から貯蔵されている言語知識を検索し言語を構築する。まず文法コード化では、語彙目録からレンマ (lemma) が検索され、文法の組み込みが行われる。そこで表層構造 (surface structure) が生成される。さらに

音韻コード化では、形成された語彙・文法表象に対応する音韻情報を検索し、文の音韻表象が形成される。このように頭の中で描かれる内在的発話 (internal speech) が生成される (常・松見, 2019)。

Levelt (1989) の言語産出モデルは第一言語に関するものである。第二言語産出においては、これらの過程に第二言語の言語形式を適切に選択しようとする過程が加わるため、第二言語の産出過程はより複雑になる (村上, 2011)。

Swain (1985) は、カナダにおけるイマージョン教育の実践から第二言語習得には理解可能なアウトプットが必要であると示し、アウトプット仮説を提唱した (Swain & Lapkin, 1995, 2002)。Swain (1985, 1993, 1995, 2005) は、発話の正確さを高めるアウトプットの機能として、気づき・きっかけ機能 (noticing/triggering function)、仮説検証機能 (hypothesis-testing function)、メタ言語機能 (metalinguistic function) をあげている。アウトプットの必要性や重要性については、Kuhl, Tsao, & Liu (2003) や Karpicke & Roediger (2008) でも報告されている。

第二言語習得の認知プロセスやスピーチプロダクションの自動化を促すためには、アウトプットの量は不可欠ではあるが、アウトプットの質もとても大切である。Johnson (2008) も指摘している通り、アウトプットの質を気にしない指導をしてしまうと化石化 (fossilization) が起きてしまう。化石化とは、ある特定の言語項目や規則が一旦誤って習得されてしまうと、その誤用がそのまま定着してしまうことである。アウトプットする際は、言語の特徴への気づきを促すだけでなく、気づいた言語情報がどのような形式でどのような機能を果たすのか、すなわち仮説生成をし、その仮説を検証する機会を十分に持つ必要がある (廣森, 2015)。

3. まとめと今後の課題

本研究では、これまでの第二言語習得研究の流れと言語習得の認知プロセスを整理した。その上で、Block (2003) が IIO (Input-Interaction-Output) モデルとよぶインプット仮説、インタラクション仮説、アウトプット仮説について考察した。英語スピーキングに習熟するためには、気づき、理解、インテイク、統合という英語習得の認知プロセスをいかにスムーズに行うことができるかにかかっている。このプロセスを効率的に促進するために、

理想的なインプット、インタラクション、アウトプットに関する実践研究が必要となる。

本研究では、第二言語習得理論に関する研究に多くの時間を割いたことにより、英語スピーキング講座は本学の英語教育研究所の講座として構築し、実施することはできたものの、実践研究が不十分となってしまった。もちろん十分な第二言語習得理論研究は英語スピーキング講座構築の必須条件であるため、多くに時間を理論研究に費やすのはやむを得ないことではあるが、今後は英語スピーキング講座の実践をとおして、認知プロセスを促進するインプット、インタラクション、アウトプットの質と量という視点からの英語スピーキング力育成の効果的なシラバスの作成と、それに基づく指導法の検討、教材の開発といった実践研究を行っていく必要がある。

4. この助成による発表論文等

①雑誌論文

[1] 服部孝彦, 「第二言語習得理論に基づいた効果的な英語スピーキング力育成に関する研究」, 日本総合文化研究会『The JAIAS Journal』, 第 23 号, 2023, pp.11-22. 【査読あり】

②学会発表

[1] Takahiko Hattori, “Improving English Speaking Skills by Learning Conversation Strategies”, 日本言語文化学会第 30 回研究大会, 2023 年 11 月 11 日, 大妻女子大学

③基調講演

[1] Takahiko Hattori, “English Lessons for Developing Communicative Competences”, 令和 5 年度兵庫県外国語指導助手指導力等向上研修 (ALT Skill Development Conference), 文部科学省・兵庫県教育委員会主催, 2023 年 11 月 1 日, 2 日, 淡路夢舞台国際会議場。

[2] Takahiko Hattori, “Transformative Practices in EFL Instruction: Strategies for Active Classroom Involvement”, 令和 5 年度三重県外国語指導助手指導力等向上研修 (ALT Skill Development Conference), 文部科学省・三重県教育委員会主催, 2024 年 1 月 18 日, 三重県総合文化会館。

参考文献

馬場今日子・新多了 (2016). 『はじめての第二言語習得論講義: 英語学習への複眼的アプローチ』東京: 大修館書店。

Block, D. (2003). *The social turn in second language acquisition*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.

Chomsky, N. (1965). *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.

Corder, S. P. (1967). The significance of learners' errors. *International Review of Applied Linguistics*, 5, 161-169.

Doughty, C. (1991). Second language instruction does make a difference. *Studies in Second Language Acquisition*, 13, 431-469.

Gass, S. (1997). *Input, interaction, and the second language learners*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Gass, S. (2013). An integrated view of second language acquisition. In S. Gass, J. Behney & L. Plonsky (Eds.), *Second language acquisition: An introductory course (4th ed.)* (pp. 497-519). New York, NY: Routledge.

Gass, S. M., Behney, J., & Plonsky, L. (2020). *Second language acquisition: An introductory course (5th edition)*. New York, NY: Routledge.

Gass, S. M., & Varonis, E. (1994). Input, interaction and second language production. *Studies in Second Language Acquisition*, 16, 283-302.

廣森友人 (2015). 『英語学習のメカニズム: 第二言語習得研究にもとづく効果的な勉強法』東京: 大修館書店。

Izumi, S. (2002). Output, input enhancement, and the Noticing Hypothesis: An experiment study on ESL relativization. *Studies in Second Language Acquisition*, 24, 541-577.

JACET SLA 研究会 (2013). 『第二言語習得と英語科教育法』東京: 開拓社。

Jacobs, G. (2003). Combining dictogloss and cooperative learning to promote language learning. *The Reading Matrix*, 3, 1-15.

Johnson, K. (2008). *An introduction to foreign language learning and teaching (2nd ed.)*. Harlow, England: Pearson Longman.

Karpicke, J. D., & Roediger, H. L. (2008). The critical importance of retrieval for learning. *Science*, 319, 966-968.

Krashen, S. (1981). *Second language acquisition and second language learning*. Oxford, UK: Pergamon.

- Krashen, S. (1982). *Principles and practice in second language acquisition*. Oxford, UK: Pergamon.
- Krashen, S. (1985). *Input hypothesis: Issues and implications*. New York, NY: Longman.
- Kuhl, P. K., Tsao, F., & Liu, H. (2003). Foreign-language experience in infancy: Effects of short-term exposure and social interaction on phonetic learning. *Proceedings of the National Academy of Science*, 100, 9096-9101.
- Lado, R. (1957). *Linguistics across cultures: Applied linguistics for language teachers*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press.
- Levelt, W. J. M. (1989). *Speaking: From intention to articulation*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Loewen, S., & Nabei, T. (2007). Measuring the effects of oral corrective feedback on L2 knowledge. In A. Macky (Ed.), *Conversational interaction and second language acquisition* (pp. 361-378). Oxford, UK: Oxford University Press.
- Long, M. H. (1983). Native speaker/non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensible input. *Applied Linguistics*, 4, 126-141.
- Long, M. H. (1996). The role of the linguistic environment in second language acquisition. In W. Ritchie & T. K. Bhatia (Eds.), *Handbook of second language acquisition* (pp. 413-468). San Diego, CA: Academic Press.
- Long, M. H., & Porter, P. A. (1985). Group work, interlanguage talk and second language acquisition. *TESOL Quarterly*, 19, 207-228.
- 村上美保子 (2011). 「教室での言語習得: アウトプット」佐野富士子, 岡秀夫, 遊佐典昭, 金子朝子 (編). 『英語教育体系 第5巻 第二言語習得: SLA 研究と外国語教育』東京: 大修館書店.
- 村野井仁 (2006). 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』東京: 大修館書店.
- Oller, J. W. (1976). Evidence for a general language proficiency factor: An expectancy grammar. *Die Neueren Sprachen*, 75, 165-174.
- Pica, T. (1988). Interlanguage adjustments as an outcome of NS-NNS negotiated interaction. *Language Learning*, 38, 45-73.
- Schmidt, R. (1995). Consciousness and foreign language learning: A tutorial on the role of attention and awareness in learning. In R. Schmidt (Ed.), *Attention and awareness in foreign language learning* (pp. 1-63). Honolulu, HI: University of Hawai'i, National Foreign Language Center.
- Schmidt, R. (2001). Attention. In P. Robinson (Ed.), *Cognition and second language instruction* (pp. 3-32). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Sharwood Smith, M. (1993). Input enhancement in instructed SLA: Theoretical bases. *Studies in Second Language Acquisition*, 15, 165-179.
- 白畑知彦 (2015). 『英語指導における効果的な誤り訂正: 第二言語習得研究の見地から』東京: 大修館書店.
- Swain, M. (1985). Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In S. M. Gass & C. G. Madden (Eds.), *Input in second language acquisition* (pp. 235-253). Rowley, MA: Newbury House.
- Swain, M. (1993). The output hypothesis: Just speaking and writing aren't enough. *The Canadian Modern Language Review*, 50, 158-164.
- Swain, M. (1995). Three functions of output in second language learning. In G. Cook & B. Seidlhofer (Eds.), *Principles and practice in applied linguistics: Studies in honour of H. G. Widdowson* (pp. 125-144). Oxford, UK: Oxford University Press.
- Swain, M. (2005). The output hypothesis: Theory and research. In E. Hinkel (Ed.), *Handbook of research in second language teaching and learning* (pp. 471-483). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Swain, M., & Lapkin, S. (1995). Problems in output and the cognitive processes they generate: A step towards second language learning. *Applied Linguistics*, 16, 371-391.
- Swain, M., & Lapkin, S. (2002). Talking it through: Two French immersion learners' response to reformulation. *International Journal of Educational Research*, 37, 285-304.
- 高島英幸 (2011). 「教室での言語習得: インタラクション」佐野富士子, 岡秀夫, 遊佐典昭,

- 金子朝子（編）. 『英語教育体系 第5巻 第二言語習得：SLA 研究と外国語教育』東京：大修館書店.
- Towell, R., & Hawkins, R. (1994). *Approaches to second language acquisition*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- VanPatten, B. (2003). *From input to output: A teachers guide to second language acquisition*. Boston, MA: McGraw-Hill Companies, Inc.
- Wajnryb, R. (1990). *Grammar dictation*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- 若林茂則（編著）・白畑知彦・坂内昌徳（2006）. 『第二言語習得研究入門：生成文法からのアプローチ』東京：新曜社.
- White, L. (2003). *Second language acquisition and universal grammar*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 常笑・松見法男（2019）「日本語学習者の日本語連続文の記憶と口頭産出における分散効果」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』第68号, 177-184.

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成（K2311）を受けたものです。